

桜蔭俳話会 六月句会(第三〇六回) 桜蔭会館

平成二十四年六月二十四日(日)

4点 父の日のワインは赤に江戸切子

貞勝

解体のひびき終はるや蟻の列

ツル子

3点 肩凝りの湿布にほへり梅雨の入

秀一

筋通す生き方かたし江戸菖蒲

明美

2点①香水の香る席あり発車ベル

ツル子

①鎮魂めき浜昼顔の咲きにけり

友子

①白バイのつらなる基地や夏薊

明美

①山寺の泉こんこん永久の音

溪水

①虫干や市井に馴染む逃亡者

明美

傘売場色とりどりに梅雨きたる

ツル子

語呂のよき車ナンバー棕櫚の花

秀一

捌く手のたしかや店の初鯉

ツル子

手書きなき郵便ばかり梅雨長し

秀一

1点①羅や認知の友と茂吉展

幸

①言ひ直すラジオニュースや明易し

秀一

万緑の中へ浮きをり五大堂

友子

削氷や君の話しはエンドレス

守

雨傘とステッキ双手に梅雨の町

溪水

色こき木生きているよと茄子の花

真三

辣韭を漬け子の刻や母の顔

幸

梅雨の夜の紅殻滲む中華街

貞勝

岩木山青きりんごの畑続く

友子

汗拭う母校のタオル絆かな

幸

縦の木の茂りの隠す武家屋敷

友子

萬緑や山懐に朱の鳥居

貞勝

行き合うて話ふくらむ七変化

秀一

文庫本忽ち読了今日も梅雨

溪水

満山の落葉松若葉抜けにけり

ヤエ子

ふるさとの近くて遠し青蚩

守

黒南風や石屋は石の隙に住む

貞勝

※夏蝶の風の中の気ままさや

ヤエ子

乱舞する暗がりのなか蚩狩

真三

ウイスキー麦酒に替えし夕餉かな

溪水

扇風機われも首ふるスクワット

明美

儉し家光あふれる楠若葉

ヤエ子

沈み込む陸のプレート浮巢かな	守
六月の祭りの射的上落とす	真三
くさるほど雨の日つづき桜桃忌	貞勝
白南風やひととせ過ぎし座礁船	守
雷鳴やしばしの辛抱三面記事	溪水
渋谷夏ハーブに毒の香のありぬ	明美
茉莉花や喘ぎつ坂を登るなり	ヤエ子
人恋しみせ側歩ゆむ梅雨晴間	真三
シャワー浴ぶ鬱の仮面をつけしまま	守
梅雨晴や大衆演劇人気なり	幸
郭公の声聞こへをり夢の中	ヤエ子
さみだれや瓦礫の山の数知れず	友子
黒南風のからだのなかを通りゆく	真三
紫蘇もみし染まる手の平遠きあり	ツル子
吉原の昔とどめる夏柳	幸

(不在投句 野上貞勝、瀬戸溪水、古野明美)